

「底が突き抜けた」時代の歩き方 548

「存在」は「存在すること」によってしか姿を現すことはできない

通信 280 (02年2月11日記) で取り上げているが、吉本隆明が9・11テロで「これは新しい姿の見えない敵との戦争である」とブッシュ大統領がいち早く発言したことについて、こう語っていた(『文学界』01・11)のが思い起こされる。

「そのような認識がなされた理由は、もちろん、6千人を越えると言われる犠牲者が国の中心であるニューヨークで出てしまって、それに驚愕したことにあると思います。ただ、それは表面的なことで、根本的には旅客機をハイジャックして、旅客を降ろさずに道連れにして、ビルに突っ込んでしまったことにあります。

テロリストたちの当面の目的は、世界貿易センタービルという現在の富の一番の中心地と、ペンタゴンという世界戦略の作戦司令部を直接攻撃することだったわけですから、その目的に旅客は全然関係ない。もし、テロリストたちが旅客を降ろして、命を懸けて突っ込んだとしたら、アメリカも『これは規模の大きなテロだ』ということで済ませたと思います。そうであれば、政治的対立や宗教的対立は歴然とあるわけですから、敵対する勢力の本拠地を自分たちの責任において、命と引き換えに破壊した行為であるということになって、人によってはそれを肯定するかもしれない。(中略)

ところが、旅客を道連れにして突っ込んでしまったことについては、どんな思想の持ち主、宗教の持ち主だろうと、あるいは深刻な敵対関係があったとしても、誰が見たって『それは人間的倫理に反するものでおかしいよ』という判断を下すと思うんです。それは人命に対して許しがたい行為だと言わなければならない。ブッシュが『これは新しいかたちの戦争だ』と発言した最大の根拠は、たくさん死んだとか殺したとかではなくて、直接目的に対して無関係な人々を、有無を言わずに道連れにして突っ込んだことで、それはどの立場からも許しがたいぜ、弾劾に値するぞ、という判断がなされたことにあると僕は考えています。」

彼のこの発言に対しては、当時は《とんでもないことをいっている》と思ったが、今改めて読み返してみても、国際的な現状認識を著しく欠いた浅薄な意見であるという見方に些かも変わりはない。同じ種類の彼の発言として記憶に残っているのは、69年1月の東大安田講堂攻防戦をテレビで見ていた彼が、長い梯子かなんかで壁を伝ってよじ登ってくる機動隊員を、籠っている学生たちが階上からなんの反撃もしていなかったことに、自分たち戦中派からすればなんとも解せない、どうして突き落とそうとしなかったのか、戦いであれば突き落とせばいいじゃないか、と語っていたのを文芸評論家の磯田光一(だったと思うが)が、自分たちには思いも寄らない、虚をつく吉本らしい見方

としてほめていたことである。そのときはなほほどと相槌を打って感心していたが、だがよくよく考えると彼の発言のほうがおかしいことに気づく。戦争でもなければ、殺し合いでもなく、大学闘争にほかならなかったのに、壁を伝わってくる機動隊員を突き落として死なせるかもしれないような反撃を、学生たちが思いつく筈がなかった。

同じ虚をつく発言であっても、一方では乗客を道連れにせずにビルに突っ込むべきだったと言い、他方では占拠学生たちはよじ登ってくる機動隊員を突き落とせばよかったのではないか、と首を傾げるように、彼の主張する「人間的倫理」に照らしても相反するところがあった。9・11でブッシュが「これは新しいかたちの戦争だ」と発言したのは、パールハーバーを念頭において、《旅客機の乗客を道連れにするかしないかにかかわらず、アメリカ本土が直接攻撃されたことが、ブッシュらアメリカ人のプライドからすれば、戦争に値した》からである。また、《ブッシュらアメリカ政府がこのテロをどうしても戦争とみなしたかった理由として、戦争と位置づけることで「新しい姿の見えない敵」を特定することができ、その敵が潜伏する地域（の属する国家）を堂々と攻撃することができるからだと考えられる。》

先の通信では、旅客を道連れにした「人間的倫理に反する」行為に対してもテロリストの《目的は、旅客を道連れにした旅客機をビルに突っ込ませることにあ》り、《ハイジャックした旅客機を爆発させることと、ビルへの突撃をドッキングさせた一石二鳥の作戦だったと推測される。現にアメリカ人だけでなく、世界中の人々が単に旅客機がビルに突撃しただけでなく、旅客の道連れが加算されたことに言い知れぬ不安を覚え、底なしの虚しさに叩き落とされたのではなかったか。少なくとも唯一の超大国アメリカの民衆を一挙に不安に陥れるのに、あれほどの作戦成功の効果はありえなかった》と説明している。更に、飛行機を攻撃されないための手段としても、テロリストが旅客を降ろして突っ込むことなど、到底考えられなかった。吉本隆明の9・11に対する見解はあまりにもピント外れであったが、加藤典洋を相手の対談（『群像』02・1）では、「人間的倫理」の問題が次のように説明されている。

「社会倫理でもいいし、個人倫理でもいいし、国家的なものの倫理でも、民族的な倫理でも、何でもいいんですけども、そういうもののほかに、人間が存在すること自体が倫理を喚起するものなんだよ、という意味合いの倫理、『存在倫理』という言葉を使うとすれば、そういうのがまた全然別にあると考えます。それを考慮しないと、この手前味噌な言い方とやり方は理解できないんじゃないかという感じ方になっちゃうのです。

『存在倫理』という倫理の設定の仕方をする、つまり、そこに『いる』ということは、『いる』ということに影響を与えるといいましょうか、生まれてそこに『いる』こと自体が、『いる』ということに対して倫理性を喚起するものなんだ。そういう意味合いの倫理を設定すると、両者に対する具体的な批判みたいなのができる気がします。」

「『存在倫理』からいくと、ビルの中で巻き添えを食って死んだ日本人も20何人いるし、アメリカ人なら数千人もいるわけですが、そういう人と、旅客機をハイジャックして、

その旅客を道連れにしたということは、とても微細なように見えても、まるで区別しないといけなと思います。片っ方は、従来の社会倫理とか、戦争の場合だったら、戦闘員と非戦闘員は区別しなきゃいけないとかいう程度の社会的、集団的なことに対する倫理があれば、それは解けちゃうわけです。

だけど、今度の場合に関係しているのは、旅客機の乗客は同じアメリカ人であろうと、同民族の人間であろうと、さしあたって金融中枢と軍事中枢に対して打撃を与えたいというモチーフからは全然関係ないということになると思うのです。これは地下鉄のサリンと同じで、偶然そこに乗り合わせたという以外ない。そうすると、これは無関係だ。無関係な者を道連れにすることはいいのか。これは非戦闘員を道連れにしたという、いわゆる従来の型の戦争とちょっと違う倫理を行使しないと、それはいえないぞと考えます。

『存在倫理』みたいなものがあると仮定すれば、あるいはそれを無意識のうちに認めるならば、乗客を道連れにするのは絶対的な悪であるということがいえそうな気がするんですよ。ハイジャックした乗客を道連れにしたことは、まず存在していること自体が倫理性を喚起するんだよという倫理性からいけば、これだけが悪で、政治的倫理がどうであろうと、つまり、おれはイスラムの方に同情するよというやつもいっぱいいるでしょうし、いや、ああいうことをやるのはよくはないよというやつもいっぱいいるわけでしょうしね。」

「テロが悪いというんなら、戦争の方がなお悪い。理屈上、そうだと思うんですよ。従来倫理からいってもそうなので、ブッシュがいうように、テロが悪くて、テロをやられた方は善だから、おれもやっつけてやるというのを肯定するわけにはいきませんよ。

そうすると、その場合には、テロも悪いし、戦争も悪いといいかえれば、それで大ざっぱな粗大ごみみたいな意味でいえば、それでけりがついちゃう。だけど、もっとちゃんと、それこそ内在的な倫理の動きみたいなのを自分の実感からずっと出していくと、どうしてもそういうふうにはならぬので、ここだけは許せぬよと一個所だけ残ります。

だけど、一般的に言って、乗客が無関係だからというんならば、あのビルに入っているやつでも、無関係なのがたくさんいるじゃないかといわれると、その無関係という意味が全然違うんですよ。乗客の無関係と、たまたまそのビルにいてとばっちりを食った無関係とはちょっと違うんだよという区別をする以外にないんですね。

そうすると、とても微妙だけど、微妙なところを振り分ける何かの概念がどうしても要するような気がしてきちゃいますね。」

「乗客をおろさないのがおかしいというんなら、ビルの中にいる、ただ働いているだけのやつが道連れになるのはおかしいじゃないか。それをいわないのはおかしいということになって、おかしいというのなら同じじゃないかという理屈になっちゃうんだけれども、それはまるで違うことなんだ。ビルの中にいる、関係も余りない、雇われているだけだという人の問題は、例えば戦争で爆撃を受けて、とばっちりで非戦闘員がこれで死んじゃったとかいうのと同じように、従来の社会や政治の倫理ではなってしまう。」

以上が、「存在倫理」にかかわってくる吉本隆明のすべての個所である。この「存在倫理」については、「電子であろうと、中性子であろうと、原子核であろうと、それが『ある』ということは、『ある』ということに影響を与える。つまり、『ある』ということは、『ある』ということの影響をこうむることを抜きにしてはいえないという物質観みたいなものがある」という量子力学、量子論を種にして考えられている。量子力学はそれまでのニュートン力学とは全く異なる様相を示し、原子や電子というミクロの世界の新しい力学として、単なる物理学の一分野を超えて新しい世界観を打ち立てた。ハイゼンベルクの提出した「不確定性原理」はその基本となる。彼は顕微鏡で電子を見ようという思考実験を設定したところ、根本的な問題にぶつかった。物体を見るために光をあてると、電子はあまりにも軽いので光によって動きが変わってしまうのだ。観測によって相手の状態が変わってしまうのだから、物体の状態を知ることができなくなる。

ハイゼンベルクはこの問題を、「物体の位置の測定誤差と測定で生じる運動量の乱れの積は、常に一定の値以上になる」とまとめた。掛け算をしたときにゼロになってはいけないと決められているのだから、誤差ゼロの測定はできないことになってしまう。この定理に対してアインシュタインが、「理論があってこそ観測ができるのであり、観測から定理が出るのだろうか」と問うたところ、ハイゼンベルクは逆に、相対性理論こそ観測から出たのにと反論したというエピソードもある。ノーベル賞を受賞することになったこの不確定原理にも、後に弱点があることがわかった。不確定性には、観測によって生じる乱れと、物体が元々備えている量子ゆらぎが混っていたのである。「生まれてそこに『いる』こと自体が、『いる』ということに対して倫理性を喚起する」という「存在倫理」の概念は、観測の不可能性、限界を突きつけた不確定性原理に着想を得て提出されているのだ。

「存在倫理」が取り出されているのは、9・11テロによる死者として全員が一様に扱われるべきではなく、道連れにされた乗客の死のありかたと、突撃されたビルの中の死者とを微細に区別する思想の必要性からである。吉本隆明の見方では、ビルの中の死者は非戦闘員の死として従来の社会や政治の倫理に収まるが、道連れにされた乗客の死はどうしても非戦闘員の死としては収まらないところがある。従来の社会や政治の倫理からはみだすとすれば、そこでは「存在倫理」のようなものを導入する以外にないということだ。なぜ、乗客の死はビルの中の人々の死と区別されなくてはならないのか。それは、テロリストの「さしあたって金融中枢と軍事中枢に対して打撃を与えたい」というモチーフからは全然関係ない死になるからだ。つまり、死ななくてはならない必然性が全くない死者であったということである。

この説明でやはり根本的な疑問を感じるのは、現代の人間に「全然関係ない」領域はあるか、ということである。「存在倫理」が提出されるためには、「無関係」であることが設定されなくてはならないが、「無関係」ということはありうるか。いいかえると、「そこに『いる』」ということは、『いる』ということに影響を与える」ようにして、人間は

存在しているということが現にありうるか。つまり、人間がただ人間そのものとして存在している、というようなことがありうるか。そのことが最大の疑義であり、もうひとつの疑問は、「無関係」と判断するのは一体、誰かということである。テロリストでないことははっきりしている。おそらく乗客のほとんどが自分を「無関係」と思ったにちがいない。同様に、ビルの中の死者たちも突撃に遭遇するなかで、自分を「無関係」と思っていたかもしれない。テロリストによる攻撃のモチーフを基軸にして、関係があるかないかが区別されなくてはならない、というのが吉本隆明の主張である。

確かにテロリストのモチーフが、「金融中枢と軍事中枢に対して打撃を与えたいという」ことに限定していたなら、乗客はその「モチーフからは全然関係ない」ということになるかもしれない。だが、テロリストのモチーフをそのように限定するのは、吉本自身である。もし彼らが金融中枢と軍事中枢に対する攻撃に際して、乗客を道連れにするというモチーフを持っていたなら、乗客も攻撃対象だったことになる。そうすると、乗客はビルの中の人々と同様に「無関係」といえなくなり、従来の社会倫理や政治倫理の枠組みの中に収まってしまい、そこに「存在倫理」が挿入される余地は見出されなくなる。「存在倫理」が持ち出されるためには、テロリストの攻撃が彼らのモチーフから逸脱している必要があり、逸脱としてみようとする吉本隆明はしたがって、「無関係」な乗客はおろす必要があったと、攻撃の変更を見直すようなことまで事後に口にする。

「乗客を道連れにしてぶち当たって、ビルが二つ壊れたとか、数千人死んだ。それが乗客をおろしてやっていたためにそれができなくて、失敗しちゃったといたら、失敗した方がはるかに重大な意味を与えたでしょう。つまり、そうなってくるとあれはヒューマニズムであるし、文明的な意味合いでの人道的であるし、もちろん命を的にやっちゃったんだから、これは宗教の恐ろしさだよという意味合いでもそうだし、そっちの方が影響は大きいともいえると思う。」

当然、テロリストが乗客を道連れにせずに、途中でおろしたうえでビルに突っ込むということになっていたら、その「ヒューマニズム」や「文明的な意味合いでの人道的」行為は、ビルに突っ込むという攻撃の反「ヒューマニズム」や非人道性と衝突せずにはいなくなる筈である。つまり、乗客をおろすという「ヒューマニズム」は、次に予定されている本命の攻撃そのものを問わずにはいなくなり、「ヒューマニズム」の拡大を迫られることになると思われる。しかしながら、吉本隆明がどのように疑義を表明しようとも、彼の考えの外で乗客を道連れにした9・11は生起したのである。彼がいくら乗客は「無関係」と考えても、テロリストから関係づけられて道連れにされてしまったのだ。自分の考えに現実の事態の動向を合わせるのではなく、現実の動向のなかに自分の考えが介在する余地を追求していく必要があるだろう。

いくら不当に感じられようとも、9・11はむしろ吉本隆明のような思想家が頭の中に宿している「無関係」の概念を吹っ飛ばしてしまったのである。「無関係」ということはフィクション以外にはもはや現実のどこにもありえないことを、9・11は白日の

下に晒すことになったが故に、攻撃されたアメリカ人のみならず、世界中の人々が不安におののくようになったのではなかったか。「無関係」の領域が存在しなくなったとすれば、「存在倫理」という概念は一体、どうなってしまうのだろう。ハイゼンベルクの「不確定原理」は観測の不可能性を突き出すことによって、観測は観測者の位置と切断されてはありえないという新しい世界観を提示したが、「存在倫理」ははたして人間が「存在すること」にどのような新しさを切り込んでいるのだろう。「そこに『いる』」ということは、『いる』ということに影響を与えるといいましょうか、生まれてそこに『いる』こと自体が、『いる』ということに対して倫理性を喚起する」ということは、人間が「存在すること」にどのような根本的な提起をつきつけていることになるのだろう。「存在倫理」に対して我々が本当に知りたいことは、その概念によってまだ知らない世界へ連れ出されることであり、その意味では「存在倫理」そのものはじっと動かずに静止したままであるようにみえる。

『ニッポンの小説 第18回』(『文学界』06・6)で、高橋源一郎が漱石の『夢十夜』を引用したうえで、それに触れた批評家の批評を取り上げて、「存在」について頭を巡らしている。

「ある晩甲板の上に出て、一人で星を眺めてゐたら、一人の異人が来て、天文学を知ってるかと尋ねた。自分は詰らないから死なうとさへ思つてゐる。天文学杯を知る必要がない。黙つてゐた。すると其の異人が金牛宮の頂にある七星の話をして聞かせた。さうして星も海もみんな神の作つたものだと言つた。最後に自分に神を信仰するかと尋ねた。自分は空を見て黙つて居た。

或時サロ^{ピアノ}ーンに這入つたら派手な衣裳を着た若い女が向ふむきになつて洋琴を弾いてゐた。其の傍に脊の高い立派な男が立つて、唱歌を歌つてゐる。其口が大変大きく見えた。けれども二人は二人以外の事には丸で頓着してゐない様子であつた。船に乗つてゐる事さへ忘れてゐる様であつた。

自分は益^{ますます}詰らなくなつた。とうとう死ぬ事に決心した。それである晩、あたりに人の居ない時分、思ひ切つて海の中へ飛び込んだ。所が - 自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れた其の刹那に、急に命が惜しくなつた。心の底からよせばよかったと思つた。けれども、もう遅い。自分は厭でも応でも海の中へ^{はい}這入らなければならない。只大変高く出来てゐた船と見えて、身体は船を離れたけれども、足は容易に水に着かない。然し捕まへるものがないから、次第々々に水に近附いて来る。いくら足を縮めても近附いて来る。水の色は黒かつた。

そのうち船は例の通り黒い煙を吐いて、通り過ぎて仕舞つた。自分は何処へ行くんだか判らない船でも、矢つ張り乗つて居る方がよかったと始めて悟りながら、しかも其の悟りを利用する事が出来ずに、無限の後悔と恐怖とを抱いて黒い波の方へ静かに落ちて行つた。……」

批評家は次のように批評する。

「行先のわからない船が、黙示録的な海を走りつづけている。『焼火箸の様な太陽』がいくどとなく昇っては沈んで波をわきたたせる。彼はこの光景に耐えきれない不安を感じる。異人が来て、『神を信仰するか』ときくと、彼は黙して答えない。この掌篇は漱石がほとんどメルヴィルを思わせるイマジネーションを駆使することのできる作家だということを立証しているが、それと同時に、『自己本位』の行動家の底にひそんでいるのが、ほとんど existential な『存在』の不安であることもものがたっているであろう。漱石は、ここで重い自己の『存在』にふれて、戦慄している。彼はその小説作品のなかでこのようなイマジネーションを完全に展開したことはなかったが、作家としての漱石の旺盛な創作活動が、このような根元的な『存在』への不安、もっとも本質的な意味での挫折から開始されていたということにはきわめて重要な意味がある。つまり、そこには、福沢の『文体』にあったあの相対主義的な行動と、内村の『文体』にあった、あの『存在』の認識と絶対者への希求とが、つねに表裏一体をなしながら、同時に存在するのである。

夏目漱石が、この二つの機軸を融合させたとはいわない。しかし、あらゆる真の作家はかならずこの二つの機軸のあいだを、漱石が終生そうしたように揺れうごかなければならない。散文をもって書く以上、彼の行動は必然的に相対主義的になる。しかし、その行動の目的が、『わな』のかなたにかくされている『現実』 - 『実在』にふれることであるからには、そこには絶対的な目標があるであろう。そこに『神』をみれば、彼は宗教家になる。しかし、そこにわれわれはかりに『実現を無限に延期されている』にせよ、人間の究極の理想である完全な自由のあかしをみるのである。そのなかに到達しようとする行動だけが、充実した『文体』 - もっとも人間的な行動の軌跡をかたちづくる」

高橋源一郎はこの《批評家の「文体」》に注目して、こう書く。

《「散文」は、ごった煮の現実を、いくつかの言葉に分解し、整理整頓して、わたしたちの前に届けてくれます。そうやって、始めて、わたしたちは、世界を「理解」することができるのです。

ここでいわれているのは、ソウセキという作家が、「存在」というものと微妙な関係を築いていたということです。あるいは、ソウセキという作家は、言葉にすることが不可能な「存在」というものを抱えもっていて、その「存在」との緊張関係が、ソウセキの「散文」を鍛え上げた、といってもかまいません。

わたしは、この批評家の、この文章を始めて読んだ時、では、いったい「存在」とはどんなものだろう、そして、どこにあるものだろう、どんな性質のものだろう、と考えました。

しかし、この文章の中に、「存在」について直接、書かれたものは見つかりませんでした。「存在」とは、「散文」によって表現される「以前」のもので、それを直接、言語化することなど不可能だ、とこの批評家は考えているように、わたしには思えたのです。》
「存在」という言葉に目を留めて追って行くなれば、ここで《ソウセキという作家は、言葉にすることが不可能な「存在」というものを抱えもっていて、その「存在」との緊張関

係が、ソウセキの「散文」を鍛え上げた》ということだが、ではその「存在」とはなにか。

《「存在」とは、「散文」によって表現される「以前」のもので、それを直接、言語化することなど不可能だ》ということである。ここに吉本隆明の「存在倫理」を差し込んでみると、「存在」とはいうまでもなく、「生まれてそこに『いる』」ということであり、「そこに『いる』」ということは、『いる』ということに影響を与えたり、「生まれてそこに『いる』」こと自体が、『いる』ということに対して倫理性を喚起する」というとき、「そこに『いる』」ということは、『いる』ということ」によって異和を発生させている。その異和は存在の不安として人間に作用していくが、それはその「存在倫理」に根差していると考えられる。

「生まれてそこに『いる』」こと自体が、『いる』ということに対して倫理性を喚起する」のは、そこに原初の人間倫理が発生しているということであり、人間が言葉を持つようになったのも、ここに「いる」ということが「いる」ことに対して限りない不安を生じさせているからだと考えられる。漱石は自分の言葉が起き上ってくる根っこに、「海」のように広がっている「存在」していること自体の不安をたえず見据えるように、「散文」を積み重ねていったということだろう。もちろん、漱石だけでなく、どの作家も《言葉にすることが不可能な「存在」というものを抱えもってい》るけれども、漱石（だけ）がその「存在」にむかって言葉を与えるように、「散文」を書きつづけたということである。

ところで、《言葉にすることが不可能な「存在」という》言いかたは、「存在」という言葉についてのある関係の秘密を明かしているように感じられる。つまり、「存在」という概念は《言葉にすることが不可能な「存在」》という規定のもとにあらわれているのであって、人間が言葉を持たない段階では「存在」などなかったことがみえてくる。いいかえると、「存在」は言葉が、《言葉にすることが不可能な》自己領域を指すことによって、そう名づけられたということだ。言葉がなければ「存在」もなかった。したがって、「存在」は言葉によって発明されたのであり、その意味でいえば、《「存在」とは、「散文」によって表現される「以前」のもので、それを直接、言語化することなど不可能だ》という考えかたは成り立たない。なぜなら、言葉と共に生みだされた「存在」に《「散文」によって表現される「以前」》などなかったからであり、言葉が発明されたとき、「存在」も《言葉にすることが不可能な》領域として発明されたと考えられるからだ。

では、言葉を持つ以前の人間は「存在」していなかったのか。そう、「存在」などしていなかったのである。動物がそこにいたように、人間もそこにいたにちがいがなかった。それは「存在すること」ではなかった筈だ。「存在」を《言葉にすることが不可能な》領域として生みだすことを必要としたのは言葉であったから、言葉を持たない人間に「存在すること」ができる筈がなかった。こう考えるなら、《ソウセキという作家は、言葉にすることが不可能な「存在」というものを抱えもっていて、その「存在」との緊張関係が、ソウセキの「散文」を鍛え上げた》という指摘は、ある洞察を含んでいるように思われる。漱石は言葉で説明したとき、説明できたことよりも説明できなかったことの

膨大さを浮き彫りにするようにして書きつづけてきた、という言いかたが可能になってくるからだ。漱石の「散文」は言葉にすることが可能なところから押し出されていたのではなく、逆に《言葉にすることが不可能な》ところからたえず押し出されていたといえるかもしれない。

このように漱石が少しみえたとき、高橋源一郎の先に続く次の言葉も勢いよく飛び込んでくる。

《ソウセキという作家が奇妙なのは、なんでも説明してしまう「散文」というものを、時々嫌っているようにみえることです。

ここで引用している『夢十夜』という小説（と呼ぶべきなのか、わたしにはわかりません）のような作品を、同時代の他の作家は、ほとんど書きませんでした。というのも、他の作家たちは、なにより理解されることを求めている、こんなわけのわからないものを書きたいなどとは思いませんでした。

ソウセキという作家が、いちばん書きたかったのは、おそらく、ここに書かれた「海」のようなものです。そして、それを、別の言葉で、すなわち「散文」でしか説明できないわたしたちは、「夢」とか「無意識」とか「存在」と呼んで、理解したような気がしているのです。

ソウセキは、「ニッポンの小説」の離陸に立会いながら、同時に、異和をも表明していました。それは、『夢十夜』とは異なる、明快な「散文」作品中に、解説しえない、ある独特な質感として残されています。》

なんでも言葉で説明してしまう「散文」を漱石が嫌っていたとすれば、それは、そのような「散文」が説明不可能な暗渠を回避することによって成り立っているのを感じ取ったからだと思われる。漱石の「散文」の特異なところは、彼の言葉が説明不可能な暗渠に埋め込まれているように感じられる点にあるかもしれない。その説明不可能な暗渠について高橋源一郎は、《わたしたちは、やはり、それを一括して、「存在」と呼びます。そして、そこで立ち止まるのです。なぜなら、その「存在」について語る方法を、わたしたちは、知らないのです》と言う。「存在」について言葉で語ることが困難なのは、言葉と同様に「存在」も時間に埋もれているからである。つまり、「存在」はまだ言葉から区別されて剔抉されて^{てっけつ}いないのだ。言葉は時間を占めるが、場所は占めない。だが、「存在」は「存在すること」として時間と共に場所を占める。いいかえると、言葉は「いま」を生きるが、「存在すること」は「いま」と「ここ」を生きる。

言葉が「存在」について語ることができるためには、「存在」が「存在すること」として場所を持たなくてはならない。要するに、「存在」しなくてはならない。では、どのようにして「存在」しようとするのか。どのような状態であれば、「存在すること」になるのか。「1968年」以降、生涯にわたって< >~{ }闘争を展開してきた松下昇は、都立大解放学校で69年12月に行った「私の自主講座運動」のなかで、「存在すること」について次のように問題提起している。

「三番目は、我々の自主講座運動のテーマはどういうものか、ということです。これは明確に定義をするのは不可能だと思うのです。むしろ、不可能である様な運動を目指しているのです。まず、明確な規定をして、これこれに近づこうという風な運動論はもはや破産したと思います。我々が創り出しうる最も深い状況に我々自身が存在すること、そのことによって引き寄せられて来る一切のテーマが自主講座運動のテーマであるし、その時やって来る全ての人間が自主講座運動の参加者になるわけです。だから、毎日、過渡的なテーマはかかげておくけれども、そのテーマどおりに進行するかどうかは分らないわけです。テーマをかかげることによって、そのまわりに変化が起ります。そして様々な力関係でこの部屋ならこの部屋に問題が殺到してきます。反論や撤去命令や機動隊導入など。その様な変化がそれ自身、持続的体系的な自主講座のテーマに合流するのです。そこにはじめて、学ぶことの怖しさが何重にも予感されてきます。」

「存在すること」にとっての可能な条件は、「我々が創り出しうる最も深い状況に我々自身が存在すること」と、非常に明快かつ簡潔に提出されている。そのように「存在すること」において、「我々が活動する空間がそのままバリケードになってしまう。例えば、この教室を授業で使うとしますと、ここを占拠して、自分達の問題提起をおこなう。別にロッカーとか、机で封鎖しなくても、我々の存在がそのままバリケードに転化していく。しかも、移動可能なわけですから、いたるところに出没して、ゲリラ的にバリケードを運動させていくわけです。これは不可視の領域へまで拡大していくべきだと思います。」

このように「存在すること」にむかって、言葉もどのように突進してくるか。「全共闘運動」という概念は、自分にとって必然的な課題と、状況にとって必然的な課題とを対等の条件で共闘させるということではないでしょうか。従って、何かを粉碎するとか、打倒するとかはそれだけでは、スローガンになり得ないのです。必ず、それと対等な自分のスローガン、自分だけの言葉によるスローガン、それがうまく表現できるかどうかは別として、そういう自分のスローガンを対等に結合させえない限り、決して或るスローガンを荷いきることは出来ないし、まして命をかけることは出来ないだろうと思います。」

言葉の問題としてみるなら、「自分にとって必然的な課題」とは言葉にとっての「価値」に相当し、「状況にとって必然的な課題」とは言葉にとっての「意味」に対応しているかもしれない。そうすると、言葉にとっての「価値」と「意味」を「対等の条件で共闘させる」必要があり、それが不可能であれば、言葉というものを「荷いきることは出来ないし、まして命をかけることは出来ないだろう」ことが予見されている。あるいは、漱石の「散文」に触れてきた文脈との関連でいえば、「言葉にすることが不可能な『存在』」にまで自分の言葉が下降していく度合いが、閉塞した状況の困難さに覆われた「存在」から繰りだされてこずにはいない自分の言葉が状況のむこう側に飛翔していく度合いと重なってくるところでの、血路の開きかたのようなものがイメージされてく

る。この課題については、次のような言いかたもなされている。

「我々が打倒しなければならないのは、決して体制だけではないし、機構だけではないということです。それと同時に、我々自身の表現の根拠、我々自身が表現するときの根拠をも含めて変革しないかぎり、何一つ始まらないだろうし、それは古い形の階級闘争に還元されてしまうと思います。いいかえると、闘争過程において自分がどのような言葉をつくり出したか、どのような言葉にひかれて、それをになってきたかという問題です。常に人の言葉で戦い、人の言葉で死ぬということは、本当に戦うこと、死ぬことになり得ないと思います。(中略)自分をそのように表現させる世界の根拠を、自分が叫び声をたてざるを得ない根拠というものを徹底的に追求することであって、それは政治という領域をはるかに超えた行為だと思うのです。そして、それこそが真の政治性のはじまりでしょう。」

松下昇がこれらの発言を大学闘争の外から、いや、闘争というものの外から行っていることに注視する必要があるだろう。闘争を展開するなかから言葉が発せられているというよりも、「我々が創り出しうる最も深い状況に我々自身が存在すること」が、大学当局の禁圧と衝突することによって、「存在すること」自体が闘争になってしまい、権力の本質を招き寄せざるをえなくなっているというようにして語られている。《言葉にすることが不可能な『存在』を現実の時=空間に突出させて、「存在」それ自体において言葉を紡がせようとする、国家権力はそのような「存在」の仕方を禁圧する行動を取るに至る。はっきりいえば、我々に「存在すること」は許容されていないのだ。「存在すること」に対する権力の禁圧は、《「存在」とは、「散文」によって表現される「以前」のもので、それを直接、言語化することなど不可能だ》という認識のなかに、我々を閉じ込めたり、《「存在」について語る方法を、わたしたちは、知らない》というところに留置させるかたちをとって、我々に内在化されている。

「存在」は「存在すること」の中にしかなく、言葉の中にはない。言語化するための「存在」について考えること自体が、「存在」を言葉の中に閉じ込めることになる。言葉が「存在」について語るのではなく、「存在すること」が言葉を語ろうとするのでなければ、永遠に《「存在」について語る方法を、わたしたちは、知らない》ままであろう。「存在すること」自体に語らしめよ。「存在」を「存在すること」に向かわせていく方法について頭を巡らせずに、「存在」を言葉で語っていくための領域として言葉に隷属させていくことの無自覚さを高橋源一郎の一文はよく示している。「存在」は言葉にされるためではなく、「存在すること」に向かわなければならないのだ。松下昇の先の発言は、時間の中で《言葉にすること》には権力は寛大であっても、現実の場所を占めて「存在すること」として姿をあらわす動きには、寛大でないことを浮かび上がらせていた。その発言は更に、時間を占める言葉を発する主体は「いま、どこにいるのか」をも問うていたのである。

2006年7月31日記

